



# うもれ木

魚津埋没林博物館広報誌

## 第34号

発行日：平成23年3月25日

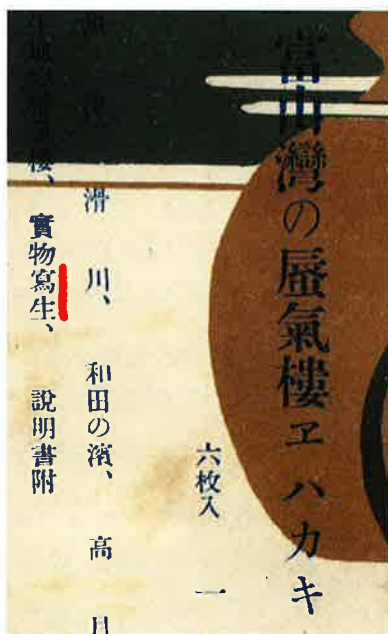
編集発行：魚津埋没林博物館

印刷：魚津印刷(株)

### およそ100年前…



るため眺りよ津魚 (三) 樓氣蜃の灣山富



(外袋を一部拡大、傍線追加)

松の木ごしに小舟が浮かぶ海辺の写真が印刷されたモノクロの絵葉書。下の文字は「富山湾の蜃気楼(三)魚津より眺めたる」と読めます。たしかに水平線あたりにバーコード状の蜃気楼が見えます。しかしよく見ると、この蜃気楼の部分は写真の原版に人の手で描きこまれたものだとわかります。

この絵葉書は大正2年(1913年)に発行されたもので、外袋には“写生”と明記されています。当時の写真機やレンズでは、蜃気楼を写すことが困難だったのでしょう。

この絵葉書を調べるうちに、魚津埋没林博物館にも関係した“ある事実”がわかってきました。さて、その事実とは…

## 蜃気楼の絵葉書探偵団

学芸員 石須 秀知

旅行で名所を訪ね、その場所の記念品を買い求めるのは今も昔も変わりません。そんな記念品の定番のひとつに絵葉書があります。日本の絵葉書は、明治33年(1900年)に私製絵葉書の使用が認められてから100年以上の歴史があります。古い絵葉書には、今では失われた風景や民俗などが描き出され、その中にとときには思いがけない情報が隠れていることもあります。蜃気楼の名所である魚津でも、明治41年(1908年)には蜃気楼を描いた絵葉書が作られていたことが分かっています。古い蜃気楼の絵葉書の中から何が読み取れるか、ちょっと探偵気分でさぐってみましょう。



この写真の撮影場所は？

まず、表紙に載せた大正2年(1913年)の絵葉書を再登場させましょう。蜃気楼を手描きにしたのは当時の写真技術を補うためと考えられます。できるだけ忠実に蜃気楼のイメージを伝えようとしていることがわかるので、決してインチキな合成写真というわけではありません。このころの蜃気楼の絵葉書の大半は、蜃気楼が手描きで表現されていました(中には龍宮城のような蜃気楼が描かれた、明らかな“絵”の葉書もあります)。

蜃気楼は別にして、気になるものが写真に写っ

ています。それは手前の線路です。現在、魚津にはこれほど海に近く岸に沿って走る線路はありません。100年前は海岸に鉄道が通っていたのでしょうか。そしてこの写真が撮られた場所はどこなのでしょう。



富山-魚津間鉄道開通記念の絵葉書(明治41年)  
鳥の形の枠内に薄く蜃気楼の絵が描かれている

魚津に鉄道(北陸線)が開通したのは明治41年で、さらに続いて直江津への延伸工事が始まりました。当時、船で運ばれた建設資材は魚津の海岸に陸揚げされ、それを魚津駅へ運搬するため貨物用の線路(通称“浜線”)が敷かれました。どうやら絵葉書に写っているのは、その浜線のようなようです。さらに調べると、浜線の一部がなんと現在の魚津埋没林博物館の敷地の一角を通過していたこともわかりました。魚津駅から西へ伸びた浜線は、ちょうど今博物館がある付近で南へ向きを変え、海岸に沿って現在の魚津港の中まで達していました。この絵葉書の写真は博物館の南側、魚津港がある場所で撮影されたこととなります。魚津港は昭和に入ってから砂浜を掘削して船の接岸・停泊地が作られましたが、明治末~大正の当時まだそこは陸地でした。昭和の魚津港工事ではこの写真の場所から多数の埋没林が出土するのです。





浜線の推定ルート(赤い線) 船の停泊地は当時なかった

北陸線の開通後、この浜線は、地元での活用の要望もむなく大正3年(1914年)の春には撤去されてしまいました。つまり、絵葉書が作られた大正2年は、わずか6~7年間しか存在しなかった浜線が姿を消す寸前だったわけです。ちなみにその路線は、昭和に入って一部が工場への引込み線として再整備されましたが、海岸を走る部分は復活しませんでした。(工場への引込み線も平成に入って廃止。)



写真(複製品) 大正2年4月撮影 二具(現出) 大正2年4月撮影 二具(現出) 大正2年4月撮影 二具(現出)

蒸気船と蜃気楼

続いての絵葉書は、魚津沖に来航した蒸気船ごしに蜃気楼が見える構図です。下部の文字から、大正2年4月に撮影された写真のようです。当時はカラー写真がなく白黒ですが、全体に青く着色されています。この絵葉書で蜃気楼以上に目立っているのは、煙突から煙を吐いている蒸気船です。蒸気船は、石炭を燃料とした蒸気機関で動く船で、当時の海運の主力として活躍して

いました。魚津港は本州各地と北海道を結ぶ寄港地の一つとして、多数の蒸気船が立ち寄る港でした。先に書いたとおり、魚津港に船が接岸できる施設ができたのは昭和に入ってからです。それまでは、大型船はこの写真のように沖合いに停泊し、貨物の陸揚げや積み込みは小型船が岸との間を往復して行いました。先の浜線で運ばれた資材もこのような蒸気船から陸揚げされていたのではないのでしょうか。



別(複製品) 大正2年4月撮影 二具(現出) 大正2年4月撮影 二具(現出)

別の蒸気船と蜃気楼の絵葉書

さて、“大正時代”“魚津”“蒸気船”の3つのキーワードから、ある大きな事件が連想されます。大正7年(1918年)7月に始まった“米騒動”です。当時、米不足に伴う買占めや売りおしめ、不十分な政策などが原因で米の値段が急激に上がり、庶民の生活を圧迫していました。その中で、蒸気船“伊吹丸”が北海道へ輸送する米の積み込みに魚津へ寄港しました。そこで魚津の女性たちが結集し、出荷元の十二銀行に対し米の積み込みをやめ地元で販売するよう求めたのが米騒動のきっかけとされています。米騒動は全国各地に広がり、当時の内閣を退陣に追い込む一つの原因となる歴史的な事件になりました。

大正時代前後の蜃気楼の絵葉書には、蒸気船が写っているものが何種類か確認されています。ひょっとしたらその中に伊吹丸が写ったものがあるかもしれません。しかし残念ながら絵葉書の写真から船の名前を特定するのはとても困難です。

平成23年は、大正100年にあたります。絵葉書を取り上げた最初の目的は、大正時代に蜃気楼がどのようにとらえられていたかを振り返ることでした。ところが、はじめは古い蜃気楼の資料として見

ていたこれらの絵葉書も、視点を変え、背景を探るとそこに興味深い歴史の側面が見えてきました。歴史と結びつくことで、科学的な探求ばかりではない蜃気楼の楽しみ方が広がったような気がします。

(ここに掲載した絵葉書は個人の所蔵品です。)

## シリーズ

### 埋没林の仲間たち ③③ オオバコ属(オオバコ科)

今の子供たちはオオバコの花茎を組んで引張り合う草相撲などするのでしょうか。

オオバコは道端など人に踏まれるような場所に生えます。オオバコの葉や花茎には踏みつけに耐えられる丈夫な繊維が通っています。この適度な丈夫さが草相撲にぴったりなのです(丈夫だが子供の力で切れる)。



オオバコ

花茎には細かい花がびっしりと付き、やがてそれぞれが小さな果実になります。果実は熟す

と上半分がフタのように取れて種子を出します。種子は水を含むと粘り、足や車輪にくっついて運ばれるので、人や車が通る場所に広がります。このようにたくましいオオバコですが、森林や背の高い草むらの中では十分に光が当らず生育しにくくなります。オオバコには人に踏まれる環境が適しているのです。



道路沿いにびっしり生えたオオバコ

魚津埋没林では、平成元年の発掘調査でオオバコ属の花粉が検出されています。

#### お知らせ

#### ●平成23年度 企画展示の予定

蜃気楼写真展——— 5月1日(日)～7月31日(日) 魚津の水循環と植物(仮)——11月1日(火)～12月28日(水)  
「大正100年 大正時代の蜃気楼」展— 8月1日(月)～10月31日(月) 魚津ナチュラルギャラリー⑩— 1月2日(月)～4月30日(月)

#### ご利用案内

- 開館時間 午前9時～午後5時(入館は4時30分まで)
- 休館日 12月～3月の月曜日、祝日の翌日、年末年始(4月～11月無休)
- 入館料 ・大人(高校生以上)・・・510円 ・小中学生・・・250円
- 交通 ・JR北陸本線魚津駅 } 下車1.5km (タクシー・・・5分)
- ・富山地方鉄道 新魚津駅 } (徒歩・・・25分)
- ・北陸自動車道魚津ICから3km車で10分

特別天然記念物 **魚津埋没林博物館**

〒937-0067 富山県魚津市釈迦堂814 ☎(0765) 22-1049  
ホームページ <http://www.city.uozu.toyama.jp/nekkolnd/>  
e-mail [nekkolnd@city.uozu.toyama.jp](mailto:nekkolnd@city.uozu.toyama.jp)

